

若松英輔氏は『悲しみの秘義』に、著名な思想家や芸術家の言葉を多く引用しているが、名もない人々の悲しみが素晴らしいものを生み出した感動的な出来事も記している。それらの中から、心を揺さぶられた3件を紹介したい。

坂本きよ子さんという人が水俣病で亡くなった。石牟礼道子氏は、きよ子さんの母親から聞いた言葉を書いている。きよ子さんは見るのもつらいくらい、手も足もよじれ、その縄のような手足でわが身を縛っていた。母親がちよっと留守をした時、彼女は縁側に転げ落ち、地面を這っていた。駆け寄って見ると、かなわない指で、桜の花びらを拾おうとしていた。肘から血が出ていた。「何の恨みも言わじやった嫁入り前の娘が、たった一枚の花びらを拾うのが、望みでした。それであなたにお願いですが、文ば、チッソの方々に、書いて下さいませんか。いや、世間の方々に。桜の時期に、花びらば一枚、きよ子のかわりに、拾うて下さいませんか。花の供養に。」伸びなくなった指で花びらを拾うとして、縁側から落ち、肘から血をだしながら「おかあさん、花を」と指さしたきよ子さんのことを、人々に伝えてくれないかと母親が懇願したのである。石牟礼氏はきよ子さんのことを知らないが、言葉を奪われた人の口になって生まれたのが名著『苦海浄土』であった。若松氏は、私たちには『苦海浄土』を書くことなど到底できないが、作品を読むことによって、母親ときよ子さんの悲願に応えることができ、桜の花びら一枚を拾うことによって、彼女たちと家族を想うことはできるのではないかと書いている。

岩崎航氏は『点滴ポール 生き抜くという旗印』という詩集を出している。岩崎氏は3歳で筋ジストロフィーを発症して以来、身動きができず、呼吸も医療機器の助けを受け、ベッドの上で、毎日を送って、39歳になった。無力な存在に見えるが、紡ぎ出される言葉は力と勇気に満ちている。「ここにいる そこにもいる／目の前にいる普通の人こそ／知られざる／勇者であること／わたしは生きて知りました。」岩崎氏は詩集の序文で、「絶望のなかで見出した希望、苦悶の先につかみ取った『今』が、自分にとって一番の時だ。そう心から思っていることは、幸いだと感じている」と書いている。若松氏は、絶望があるところには必ず希望が隠れ、失望を飲み込み、希望の光に変じ、内なる勇者を目覚めさせると書いている。存在を肯定する「光」が見えた時、人は希望と勇気を得るのではないか。

ヨハネス・イッテンというスイスの画家が画学生たちに模写を教えようとしていた。画材は、グリューネワルトの描いた「嘆きのマグダラのマリア」であった。マリアは弟子に加えられていなかったが、男の弟子たちの誰よりも師イエスの近くにいた。主イエスが捕らえられた時、男の弟子たちは蜘蛛の子を散らすように逃げ去ったが、彼女は十字架の下まで行き、主イエスの死にゆく姿を目の前で見ている。グリューネワルトの絵は、手と足に釘を打たれ、十字架上で苦悩する主イエスの姿と、悲しみ、呻くマリアの姿を描いている。画学生たちは、すかさず絵筆を取った。その時イッテンは、「すぐに模写を始める前に、やることあるでしょう。まず、この絵を見て、涙を流して、とても模写などできない、というのでなければ、芸術家とは言えない」と言った。若松氏は、「表されているのは、悲嘆する女性の像ではなく、悲しみそのものである。悲しみは目には映らない。しかし、心でなら受け止めることができる。なぜ、心で描こうとしないのかというのである」と書いている。悲しみへの共感なくして、悲嘆するマリアは描けない。悲しみは希望と勇気を生み出す。それらを、互いに共有し合うことが生きるということであろう。